

筑前の小京都

秋



月

AKIZUKI

観光案内
— 戦国時代編 —



律管脇立桃形兜・
緋糸威胴丸具足 小具足付



銀箔押蛤脇立突盔形兜

戦国大名 秋月氏の時代

九州戦国の三氏鼎立時代

九州での戦国時代の永禄3年（1560）年代からは大友宗麟、肥前の龍造寺隆信、薩摩の島津義久の三大勢力の拮抗の時代でした。その均衡は、天正6年（1578）の「耳川の戦い」で大友家が島津家に大敗したことによりあえなく崩れ去ります。この戦いを契機として大友家は次第に衰退の一途をたどることとなります。かつて九州に覇をととなえた大友宗麟にその勢いはなくなり、九州で最強となったのは南の島津氏、西の龍造寺氏となりました。このような大きな勢力の狭間で、時代の波にのまれながらも奮闘していたのが秋月氏です。

九州戦国信念の人 秋月種実

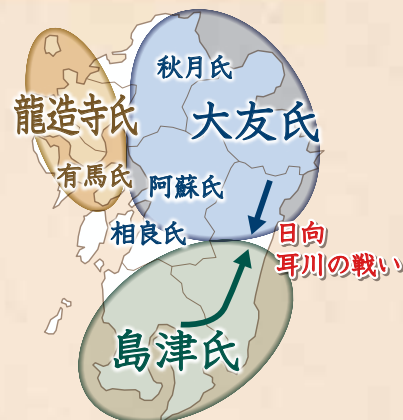
秋月氏は種雄を初代として、鎌倉時代の初めから400年近く、秋月の古処山城を拠城として、朝倉地方を領有支配した武家です。その16代・秋月種実は、少年期には毛利元就に庇護されるなど苦労をしましたが、成長してからは北九州の有力な戦国大名として活躍しました。しかし晩年は、豊臣秀吉の命令によって日向国高鍋の地に移封されるという波瀾の生涯をおくった人物です。

○毛利元就のもとへ

種実は、秋月氏15代・種方（文種）の二男として天文14年（1545）に生まれ、幼名を黒帽子といました。時は戦国時代の真ただ中です。弘治3年（1557）、彼が13歳の時、豊後大分の大友宗麟の軍勢が秋月に攻め寄せ、秋月方は奮戦むなしく敗れて種方と嫡男の晴種は討ち死にし古処山城は落城しました。このとき種実と弟2人は家臣に守られて城を脱出し、周防山口の毛利元就を頼って落ち延びました。毛利元就の庇護を受けて成長した種実は、数年後に元就の支援を受けて秋月に戻り古処山城を奪還しますが、その時期や経緯については諸説があって明確ではありません。種実帰還との報せを聞いて旧家臣が参集し、秋月氏は再び勢いを盛り返しました。

○大友宗麟との戦い

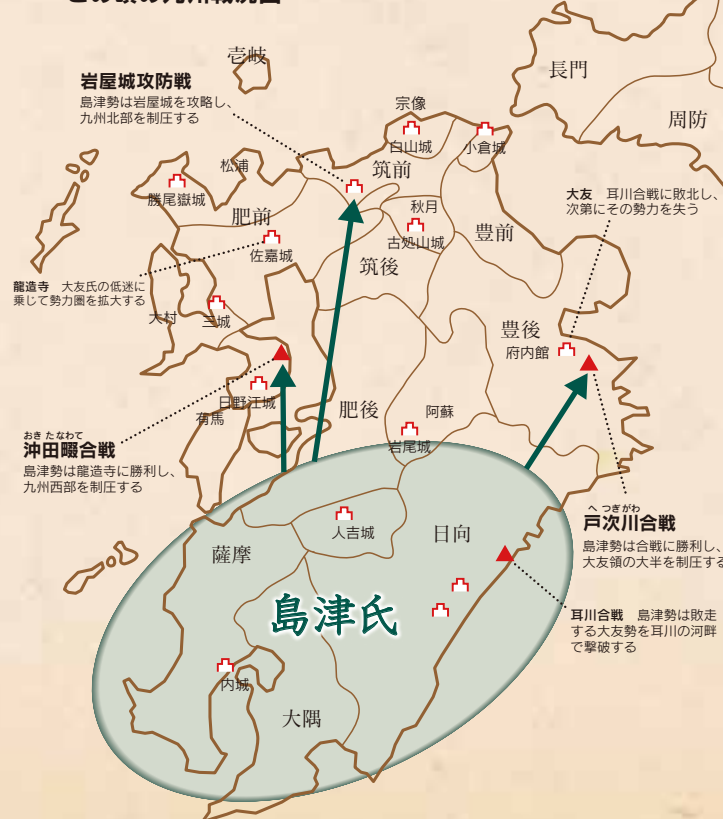
永禄10年（1567）、大友氏の重臣だった筑前宝満城の高橋鑑種が大友宗麟に反旗を翻しました。このとき種実は高橋鑑種に味方して挙兵しました。このことに腹を立てた宗麟は秋月討伐のため2万余の大軍で攻め寄せ、これに対し秋月勢は果敢に迎え撃ち奮戦しました。さらに、休松（現在の朝倉市柿原付近）にあった大友軍の本陣を奇襲攻撃して勝利しました。この秋月方の勝利は青年武将秋月種実の実力を近隣の武士たちに認識させ、種実の名声は上がりました。このあと種実は大友方と一時和睦して宗麟に従属しますが、天正6年（1578）、日向耳川の合戦において大友軍が薩摩の島津軍に大敗して大友宗麟の勢威が衰えると、種実は再び反大友の旗を掲げて大友勢に挑戦し各地で合戦を繰り広げました。大きな戦いでは天正8年（1580）田川の猪膝合戦や天正9年（1581）筑後川原鶴合戦などがあります。



秋月氏の支配領域（最盛期）



この頃の九州戦況図



○有力な戦国大名に成長

このころ、薩摩の島津義久が九州北部にまで勢力を拡げてきました。種実はこの島津氏と同盟して、筑前や豊前の大友領内に進出していき、やがて筑前、筑後、豊前3ヵ国内において11郡を手に入れ、石高36万石に相当する領地を有する有力な戦国大名に成長していきましました。しかし大友方の名将立花道雪や高橋紹運に阻まれて、商業都市博多に進出できなかったことは種実の痛恨事でした。種実は広大になった領土に秋月二十四城と呼ばれる支城を築き、重臣を配置して防備に当たらせ領民の統治をさせました。しかし彼の領国行政についての記録は何も遺されていません。ただキリスト教の布教を許しキリシタンを保護したことが『耶穌会日本通信』の中に載っています。また肥前の龍造寺隆信が島津氏と対立したときには和議の仲介をしたり、近隣の国人衆（地方の小領主）をまとめてその盟主になるなど外交的な手腕も持っていました。

○豊臣秀吉の九州平定

天正15年（1587）、全国平定を目指す豊臣秀吉は、大友宗麟の要請を受け太閤の威令に服従しない島津義久を討伐するために、20万余の大軍を率いて九州に出兵してきました。このころ、種実は領主の座を嫡男の種長に譲って隠居し名前も宗全と改めていましたが、采配の実権は種実が握っていました。秀吉の九州征伐に対して秋月方の対応が重臣を交えて評議されましたが、秀吉軍の情報を持たずその強さを知らないまま、島津方との盟約を尊重して秀吉軍と戦うことを決しました。このとき恵利内蔵助暢堯は秀吉軍と戦うことは無謀だと主張しましたが聞き入れられず、妻子を刺殺して切腹し自らの命を投げ出して主君を諫めるという悲劇も起こりました。豊臣秀吉との決戦を覚悟した秋月勢は近隣の国人衆の応援も得て2万人余が古処山城を中心に陣を構えました。やがて秀吉の大軍が古処山の北側一帯に着陣しました。その軍兵の多さと軍装の華やかさに圧倒され、忽然と出現した「一夜城」に肝を潰して、秋月勢は一気に戦意を喪失してしまい、種実、種長親子は墨染衣に身をつつみ秀吉の前にひれ伏して降伏しました。このとき天下の名器と賞された肩衝茶入『檜柴』を献上したので、秀吉が機嫌を直し、種実、種長親子は死罪を免れたといわれています。秀吉は秋月に3日滞在したのち、島津討伐に軍勢を進めますが、このとき種長は島津攻撃の先鋒を命じられて手勢を率いて従軍しました。

○日向高鍋に移封

天正15年（1587）5月、島津義久が降伏して豊臣秀吉の九州平定は完了しました。秀吉は博多に戻って市街の復興を命じるとともに九州諸大名の知行割を決めましたが、この中で秋月種長は筑前、筑後、豊前の領地を没収されて、日向国財部（高鍋）に500町（3万石）を頂戴して移封（領地替え）を命じられました。種実は一族や家臣とともに日向の新封地に移りますが、いよいよ秋月を離れるときに、波瀾の生涯を振り返り「知行は十石でもよいから秋月に留まりたい」と嘆いたという十石山の伝説があります。秋月氏は種長を祖とする高鍋藩3万石の藩主として江戸時代まで存続しますが、九州からの雄飛をも夢見たであろう種実は、失意の晩年を福島（申間）の御館で過ごし、また人質のような立場で京都や大阪で暮らすことも多かったようです。秋月を去って9年後の慶長元年（1596）9月に京都で病没しました。享年52歳、墓は京都の大徳寺と申間の西林寺にあります。

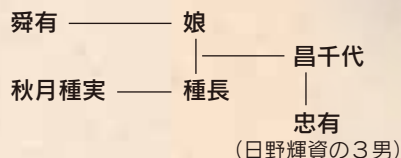
黒川院

正慶2年（1333）12月、後伏見天皇第6皇子長助法親王が彦山の座主として入御され、その館を上座郡黒川村（朝倉市黒川）につくり「黒川院」と称しました。この長助法親王（助有法親王）から舜有法主まで（天正15年）14代の座主が黒川に館を構えました。15代の忠有法主以降館は彦山に移され、27代の教育法主まで続いています。



▲舜有法主の墓

座主と秋月氏との関係

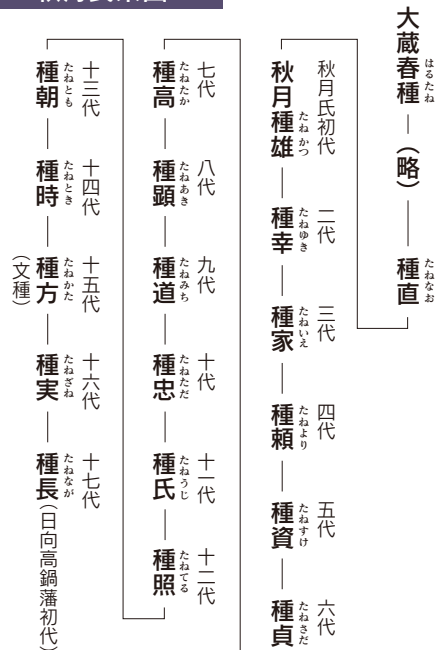


▲豊臣秀吉が座ったとされる太閤腰掛け石



▲恵利暢堯親子が自害したとされる「腹切り岩」

秋月氏系図



戦国大名 黒田氏の時代

戦国大名 黒田氏の時代

慶長5年(1600)、関ヶ原の戦いで勝利した徳川家康は、恩賞として筑前国を黒田長政に与えます。長政は新たに「福岡」という城下町を形成して、福岡藩の初代藩主となり、秋月には孝高(官兵衛)の弟の黒田直之が1万2000石を与えられて移り住みました。元和9年(1623)、長政の遺言により2代藩主忠之は、弟長興に秋月周辺の5万石を分け与えて支藩秋月藩が誕生します。

秋月藩初代藩主 黒田長興



▲黒田長興画像(古心寺蔵)

○秋月5万石の分知

福岡藩を興した黒田長政はその死に際して、三男の長興に5万石を分知するよう遺言しました。この遺言に基づき元和9年(1623)8月、福岡藩を継いだ兄・忠之から長興に、秋月で5万石の分知目録および2人の付家老と47人の付属する家臣(御付衆)の名簿が渡され、ここに長興を藩主とする秋月藩が誕生しました。長興が14歳のときでした。長興は慶長15年(1610)生まれで、母・永子は徳川家康の養女(親戚の保科正直の娘)です。幼名を犬万といいましたが、少年期から聡明で、父の長政は何かと不行跡の多い長男・忠之よりも三男・長興に世継ぎの期待をかけていたともいわれています。長興は13歳のとき、祖父・孝高(官兵衛)の名をもらって勘解由孝政を名乗り、23歳で長興と改めました。長興は寛永元年(1624)7月に秋月に入り、梅園(現在の秋月中学校)にあった古い屋敷に普請を加えて居城(御館)としました。城下町の縄張り(都市設計)が行われ、武家屋敷や町家の建築が進みました。当時の槌音高い秋月町の賑わいが想像されます。

○秋月藩創立の苦労

長興が大名として認められ秋月藩が公認されるためには、江戸に出て將軍に拝謁し、所領安堵の御朱印を拝領することが必要です。そのため秋月では家老の堀平右衛門たちが長興の江戸参府を計画しました。ところが、福岡本藩から長興の江戸参府を禁止する命令が届きます。これは兄・忠之が弟・長興を家来として処遇し、秋月の5万石は福岡藩領内の一部であると解釈するもので、秋月側としては承服できないことでした。長興は、この命令を拒否して江戸参府を強行しました。福岡藩の監視の目をかすめて、僅か10数人の供回りで密かに秋月を出立し、夜陰に小さな漁師船で関門海峡を渡るなどの苦労を重ねて江戸に到着しました。寛永3年(1626)正月に、長興は3代將軍・徳川家光と前將軍・秀忠への拝謁が許され、同年8月には朝廷から甲斐守に叙任されて正式に大名に列座することができました。このあと長興は、江戸に滞在して將軍上洛のお供をしたり江戸城警備や幕府普請の手伝いなどをして將軍家への忠勤に励み、ようやく寛永11年(1634)に秋月領5万石の朱印状を賜うことができました。孝政から長興と改名したのもこのころで、黒田長政血縁の新しい藩を立派に興そうとする決意がくみとれます。

○藩政の基礎固め

このころ国元の秋月では、城下町の建設が進み、併せて新しい家来の雇い入れが行われ、藩の行政組織や藩士の役割編制がなされました。ちなみに長興時代の家臣の数は(詳細にはわからないものの)、馬廻・無足・組外等の上士身分の者が100人、徒士・郡方・目付等の下士身分の者が150人、足輕身分の者が300人くらいであったと考えられます。このような藩の仕組みを整える過程で、その仕事の中心に



▲寛永13年(1636)以降の秋月藩領域図

あったのが上席家老の堀平右衛門（知行5000石）ですが、次第に彼の独断専横が目立つようになり、家臣の中に不満の声が出てきました。このことで藩主・長興から厳しく叱責された堀平右衛門は秋月藩を退去してしまいました。同時に堀一派の10数人も集団で脱藩し、藩内に大きな動揺が起きました。しかし、長興は19歳の若年ながら沈着冷静に対処してこの混乱を見事に収拾し、家臣領民の信望を集め藩政の基礎を固めていきました。

○島原の乱に出陣

寛永14年（1637）10月、島原の乱が起きました。天草四郎を総大将に奉じた一揆3万人余が島原半島の原城^{はらじょう}に立て籠もって、領主の過酷な重税とキリシタン弾圧に抵抗して反乱を起こしたのです。この乱の鎮圧に幕府は、九州の諸大名に号令して12万人もの大軍を動員しました。寛永15年（1638）1月、幕府の命令を受けた黒田長興は、約2000人の兵を率いて島原に出陣しました。同年2月末の原城総攻撃のときに秋月勢は奮戦しましたが、このときの長興の泰然とした大将ぶりと的確な采配は、家臣たちに勇氣と安心を与えました。この乱は激しい戦闘の末に鎮圧されましたが、秋月勢は戦死者35人と負傷者345人を出しました。秋月に帰陣後、戦死者の葬儀を盛大に執り行い、遺族や負傷者への見舞いを懇篤にしました。また、各人の働きに応じた褒賞が適切公平であったので藩主・長興に対する家臣たちの敬愛は絶対的なものになりました。

○長興の領内統治

秋月藩5万石の所領は、夜須^{やす}、下座^{げざ}、嘉麻^{かま}の3郡内の55カ村ですが、山間地が多く含まれていて農業生産力が低く、また、商業の盛んな甘木町は秋月領から外されていたので、藩の財政は当初から多くの困難を抱えていました。しかし、長興が家老などに与えた文書には、「百姓ヲ憐ミ」や「百姓ニ痛カラザルヨウニ」などの文言があり、藩財政を支える農民に対して無理な年貢や労役を課さないように戒めています。長興時代の事業で主なものとしては、原地蔵（筑前町）の新田開発や、小石原川と野鳥川が合流する女男石の護岸工事等があります。また、山間地を家臣に分けて与えて植林育成させることも行いました。新八丁峠道を開削したり、野町（筑前町）に宿駅を創設したりするなど秋月街道の整備にも努めています。長興の日々の暮らしは、質素倹約を率先すると共に武芸や学問に励んだと伝えられています。秋月藩の質実剛健で尚武^{しょうぶ}の気風は、初代藩主・長興のときから始まったと言えます。長興は、父・長政の菩提寺として古心寺（朝倉市秋月）を、母の菩提寺として大涼寺（朝倉市秋月）を建立するなど数々の業績を残し、寛文5年（1665）3月、江戸の藩邸で亡くなりました。享年56歳、藩主在位42年でした。遺髪が秋月の古心寺に葬られ、また、死後200年経った安政6年（1859）に垂裕明神の神号を贈られて、今も垂裕神社に祭られています。



▲古心寺にある長興の墓

秋月藩中興の祖 黒田長舒^{なが のぶ}

○8代藩主長舒誕生

黒田長舒は、明和2年（1765）日向高鍋藩7代藩主種茂^{たねしげ}の二男（幸三郎）として生まれましたが、天明5年（1785）21歳のとき、秋月藩8代藩主として迎えられました。長舒は叔父の上杉鷹山^{とうざん}をはじめ、先祖に上杉謙信・秋月種実・黒田如水^{きらい}・吉良上野介^{こうずけのすけ}・妻方に山内一豊^{かず とよ}等多彩な血筋を持ち後に秋月藩中興の祖と讃えられました。時まさに徳川11代将軍家斉の治世、老中松平定信^{いえなり}の寛政の改革、その後の文化・文政の江戸文化が花咲く前の頃でした。秋月藩は、天明4年（1784）7代藩主黒田長堅^{ながかた}が嗣子がないまま、18歳で若死にし、断絶の危機を迎えました。秋月藩のこの事態に、福岡藩は秋月藩廃絶を画策しましたが、家老渡辺典膳^{なかつた}などの努力で藩取り潰しの危機は免れました。この時、長舒は、父の高鍋藩主秋月種茂の母（春姫）が秋月藩4代藩主黒田長貞^{ながさだ}の娘という黒田家・秋月家双方の血をひき、若い頃から文武に秀で、その資質を高く評価されていたので、まさに秋月藩が跡継ぎとして渴望した人物でした。藩主となった長舒は家老渡辺典膳などが建白した「国計大則」によって蓄えられた備蓄金を活用し、若さと英知を駆使してさまざまな業績を残していきました。

○長舒の善政

長舒は、叔父上杉鷹山を畏敬し、鷹山を範として諸般の振興を図り、藩主として領民への慈しみの心を終生持ち続け、『経世済民^{けいせいさいみん}』を実践しました。この頃、全国的に危機的な年貢の減少と農民の労働力が不足していたので、その増大を図るとともに人命尊重という人道上からも、長舒は子の間引きを禁止し、妊婦は庄屋に届けさせ、子育ての困難な家庭には養育米を与えました。更に領内を巡回し、領民に声をかけ、善行者を表彰し、80歳以上の人を招いて労をねぎらい、酒食をともにして贈物をしました。また、長舒は相撲を好み、力士を競わせたり、別荘で花火を揚げさせたり、八幡神社で歌舞伎芝居を催させたりして、人心を和ませました。領民への慈しみと高齢者へのいたわりの心を藩主自ら実践したのです。

○学問奨励と藩校稽古館

安永4年(1775)7代長堅のとき、後に稽古館と呼ばれ、藩校となる学問所が設けられました。長舒は、藩主となると本藩から祖來派の亀井南冥や京から山崎派の小川才次などを招き、学問を奨励しました。その後亀井南冥に学んだ原古処を稽古館訓導(後に教授となる)に任じました。向学心の旺盛な長舒は、自ら我が子連れて講義を受け、更に家老や諸役人に至る家臣たちにも広く講読させました。また、兵学をはじめあらゆる武芸を奨励し、熟達藩士に師範役を命じ、指導に当たらせました。こうして長舒は、稽古館を、実父高鍋藩主秋月種茂の明倫堂、叔父米沢藩主上杉鷹山の興義館に比肩する藩校とならしめ多くの人材を育成しました。

○秋月の文化を彩る俊英たち

長舒の治世の下、秋月文化の中心的存在として原古処・緒方春朔・斎藤秋圃などを輩出しました。原古処は、手塚家の二男として生まれましたが、生来の利発さと英才ぶりを儒学者原担斎に見込まれ、懇請されて原家の養子となり、家督を継ぐことになりました。その後、藩の諸奉行などを歴任し、長舒の信任を得て、稽古館の教授となり、秋月の文化・教育を大いに振興し、有為な人材を育成しました。また、長舒は原古処の意見を採り入れ、藩財政立直しとして、特に桑の栽培と養蚕を奨励していきました。長舒の学問の奨励は、医学の研究発展にも寄与しました。長舒は7代藩主長堅が痘瘡に罹り、18歳で早世したので、痘瘡を防ぐ方法を模索していました。その頃藩医の緒方春朔がこの難病と取り組み、中国の書籍の研究を続けていたので、長舒も協力し、遂にその免疫法が考案されました。春朔は、久留米の領民でしたが、医者を目指し長崎で勉強に励んだ後、長舒によって秋月の藩医に迎えられ、種痘の研究に専念してイギリスのジェンナーより6年も早く免疫法を完成させたのです。成功の陰には、上秋月の大庄屋天野甚左衛門の多大なる協力があればこそでしたが、藩主、藩医、篤志家の心がひとつになっての偉大な功績と称賛されるべきでしょう。この種痘法の成功は、秋月藩のみならず全国の医学の進歩に寄与しました。更に秋月文化の担い手として、絵師斎藤秋圃がいます。秋圃は長舒に見い出され、秋月藩御抱え絵師となりました。秋圃は、長舒主催の太宰府書画展覧会に施龍図を出品するなど、筑前絵師の中心的存在で、特に秋月時代は狩野派風御用絵のほか写生的鹿の絵の名手として知られていました。島原の乱戦闘図屏風は、秋月博物館に、また長生寺の秋葉堂には天井絵が今に残っています。

○悲願の目鏡橋完成

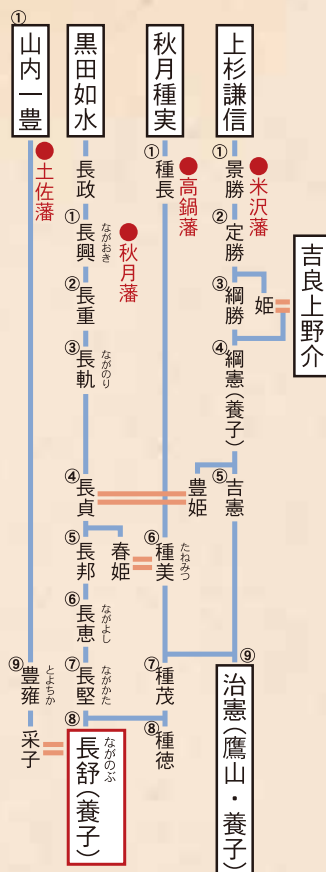
長舒が行った今なお残る業績に、秋月街道に架かる目鏡橋があります。7代藩主長堅の急逝による8代藩主長舒擁立に際して、秋月藩はその代償として、福岡藩が幕府から任じられていた長崎警備役を代わりに務めなければならなくなりました。その頃、筑前秋月と筑後・豊前を結ぶ木の橋は、人馬の往来も激しく橋の損傷も著しく、大洪水時には瞬時に流されてしまいました。長崎に警備していた長舒は、長崎の石橋と同じものを野鳥川に是非架けたいと熱望しました。その頃は藩財政も厳しくなっていました、家臣や領民の要望が強まり、長舒はついに架橋建設を決断しました。ところが不幸にも竣工を目前にして



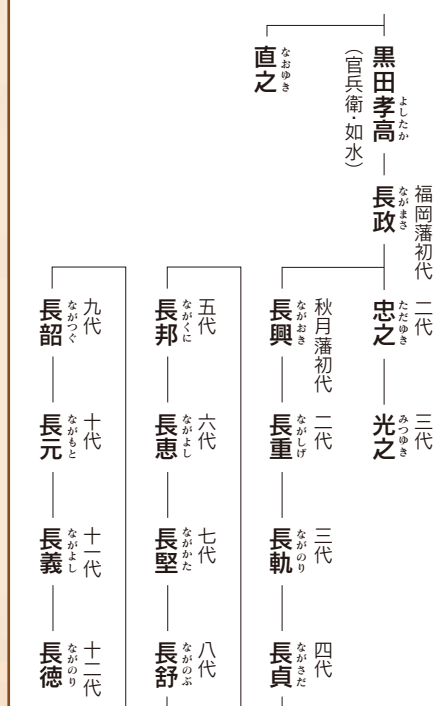
▲石造秋月の目鏡橋(県指定文化財)

橋は崩壊し、病床にあった長舒は、目鏡橋の完成を見ることなく、文化4年(1807)43歳で逝去しました。しかし崩壊から3年後の文化7年(1810)9代藩主長韶の時、悲願の目鏡橋が野鳥川に美しいアーチを描いてその姿を現しました。ただ、渡り初めのその時に、晴れやかな前藩主長舒の姿を見ることができなかったのは、家臣・領民の涙を誘うものでした。

長舒を彩る系図



黒田氏系図



黒田家の中でも熱烈なキリシタン 黒田直之^{なおゆき}



▲黒田直之（福岡市博物館所蔵）

慶長5年（1600）天下分け目の関ヶ原の戦いが終わると、筑前には豊前中津より黒田孝高（官兵衛）の嫡男で武勇の誉れ高い黒田長政が移って来ました。長政は、秋月の地の重要性から、筑前入国と同時に叔父黒田直之を秋月に配しました。孝高は敬虔なキリシタン大名（洗礼名：シメオン）であったことは広く知られていますが、直之も孝高のすすめによって信者となり、洗礼名をミゲルと称しました（ちなみに長政の洗礼名はダミアン）。秋月を直之が治めるようになってから、秋月は博多とともに筑前におけるキリシタン信仰の中心地となり、直之は城下に新しい天主堂を建て盛大な献堂式をあげました。こうして教会も出来たので、復活祭や主だった祝日には筑後や肥前の信徒たちまで式や祭りに参加するようになりました。こうして直之の影響は筑前全域をはじめ各地に



▲秋月城跡出土罪標付き
十字架浮文軒丸瓦
（朝倉市教育委員会蔵）

及び、秋月は九州伝導の本拠地となり、ここを拠点として宣教師たちは筑後地方へも布教に出向き、信者数も大きく伸び、この年には2000名以上の授洗者があり秋月は大いに栄えました。しかしながら、直之は秋月に封ぜられてわずか10年にしてこの世を去りました。

十字架の上に罪標を加え、キリストが十字架にかけられたゴルゴダの丘まで表現している。

栄えある三奈木黒田家の初代 黒田一成^{かずなり}

※かずしげと呼ぶ説もあります。



▲黒田一成（福岡市博物館所蔵）

○三奈木 黒田氏の起こり

戦国時代、織田信長は、当時の常識を破る新しい政策「天下布武^{てんかふぶ}」のもと、天下統一を目指していました。しかし、天正6年（1578）、信長の家臣・荒木村重が離反し、有岡城（兵庫県）にこもって信長と戦うことになりました。このとき、豊臣秀吉の使者として、村重に翻意を促すため城へ向かったのが、黒田孝高（官兵衛）です。しかし逆に孝高は、城の土牢に幽閉されてしまいました。孝高の監視役を命じられた村重の家臣・加藤重徳^{かとうしげのり}は、監視をしているうちに孝高の奇才を慕うようになり、二人は心が通じ合うようになりました。孝高は「そなたは私の命の恩人。もし私がこの城から脱出し、再び活躍するときがきたら、そなたの一子を立派な武士として育てたい」と、重徳と約束したのです。村重は戦いが不利と見るや、妻子や多くの女房たちを残し、天正7年（1579）、近臣の数名と密かに城を脱出します。村重の脱出で孝高も城から救出され、孝高は秀吉の軍師として活躍しました。戦国時代、約束の反古や裏切りは日常茶飯事でしたが、孝高は約束を守り、重徳の次男を養子に迎え、我が子・長政と同様に養育しました。そして後に、黒田の姓を与えます。これが三奈木・黒田氏の始まりで、初代が黒田一成です。

○生い立ちと戦歴

黒田一成は、元亀2年（1571）、伊丹村（兵庫県）に加藤重徳の次男として生まれ、幼少のころは玉松と呼ばれていました。9歳のとき、孝高の養子となり、孝高の薫陶を受けて育ち、名も黒田一成（美作、三左衛門）となります。天正12年（1584）、一成が14歳のとき、長政に従い、根来雑賀の僧勢と泉州岸和田（大阪府）で勇戦します。これが一成の初陣でした。一成はその後も幾度となく出陣しますが、天正15年（1587）、秀吉の九州征伐のとき、薩摩と日向耳川の激戦で先陣をなし、高名をあげます。文禄元年（1592）と慶長2年（1597）の二度の朝鮮出兵のときも、長政に従い、後藤又兵衛とともに勇敢に戦い、「黒田藩に一成あり」といわれるようになりました。豊臣秀吉の死後、慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いでは、長政が徳川家康に味方するや、君命を受けて、石田三成派と死闘を繰り広げ、徳川方の勝利の一因をなします。その軍功で、長政は筑前52万石の大封領を与えられました。長政は一成の偉功に対し、三奈木を中心とした下座郡（旧甘木市の一部）1万5000石（幕末には1万6000石になった）を与えます。その後も、大阪夏の陣・冬の陣に出陣し、今までの武勇をもって、最も若くして黒田二十四騎の一人に加えられました。一成は、その二十四騎の中でも、八人の剛将の一人に選ばれるほどの実力でした。

○最後の出陣、島原の乱

島原藩の松倉重政・勝家父子二代にわたる藩政は、領民へ苛酷な賦役と重税を課し、また、キリシタン弾圧などを厳しく行いました。このため領民は、寛永14年（1637）10月、天草四郎時貞を盟主として一揆を起こします。後にこの一揆は「島原の乱」と呼ばれるようになりました。

黒田 52 万石を救った栗山大膳



▲栗山大膳画像（市指定文化財：円清寺蔵）

世に知られている「黒田騒動」は、元和9年（1623）長政没後から始まります。新藩主になった忠之のわがままは治まらず、家臣をむやみに打ち叩いたり、近臣を集めては毎日酒宴におぼれ、剛健・質素の家風は忘れられていきます。大膳をはじめ藩の重臣たちが忠之に何度諫言してもとりあってももらえず、藩政は陰悪な状況になっていきました。忠之は、幕府が最も嫌う軍船を建造し幕府のとがめを受けます。大膳などの謝罪で事なきを得ましたが、忠之の乱行は治まりません。忠之は、領主になる前から小姓として仕えていた倉八十太夫をかわいがり、食禄は加増を重ね9000石にまで取り立てています。さらに、重臣のだれにも相談なしに十太夫を家老にし、十太夫の権威は藩随一になります。忠之のわがままは益々ひどくなり、藩の乱れは承知しながらも藩の重臣たちも口をつぐみます。諫言をなすのは大膳のみとなり、諫言してもしりぞけられ続けました。忠之は、独断で新規に足軽200人を抱え、一銃隊を編成して十太夫につけます。この時代、大名が城郭を補強・修理したり士卒を雇い入れたりすることは禁止されていて、幕府による藩取り潰しの口実にされかねない出来事です。大膳は、若

輩の十太夫に頭をさげ、諫言書を藩主忠之に届けるよう依頼します。十太夫はこれを握りつぶし、大膳の悪口を言いつけて忠之をたきつけます。こうして忠之と大膳の間には修復できない亀裂が生じてしまいます。忠之は大膳の殺害を口にしますが、大膳は職を退いて杷木志波の邸に帰り、藩をつぶすことなくこの急場を乗り切る方法を考えていました。寛永9年（1632）6月、大膳は九州大名の総目付け日田代官に「藩主に反逆の企てあり」との訴状を差し出します。これは、裁きの庭で長政と家康の関係を幕府高官に再確認させることが目的で、自身は「主に対する反逆の罪」に問われることを覚悟しての行動でした。思惑どおり寛永10年（1633）3月、大膳は裁きの庭で諸老中を前に「御老中の御威光による御意見をいただく以外には、主・忠之をして神君・家康公の御厚志を守り通さす方法見当たらず公訴の手段をとりました。家康公の御意思をふみにじってはなりません」と釘をさしています。大膳の命をかけた訴えによって、次のような幕府の評定が出されました。「治世不行き届きにつき、筑前の領地は召し上げる。ただし、父・長政の忠勤戦功に対し特別に旧領をそのまま与える。」「大膳は主君を直訴した罪で奥州盛岡に配流。150人扶持を生涯与える。」こうして黒田藩はとりつぶしを免れ、その後忠之は島原の乱や長崎警護の任で活躍し、城下町の賑わいのために尽力しています。大膳は、盛岡で罪人あつかいされることなく、62歳で生涯を終えました。お墓は岩手県盛岡市にあります。

○栗山大膳の業績など

大膳は、遠賀川流域の洪水調整や灌漑、水運を目的に、遠賀川から洞海湾に通じる堀川の工事を元和7年（1621）に着工しています。長政の死によって中断しましたが、128年後の宝暦元年（1751）に再開し、宝暦12年（1762）に完成しています。灌漑用水として田畑を潤し、物資の輸送路としても活用されました。全長約12.5kmで「大膳堀」と呼ばれています。松末地区の杷木星丸にある「野手八幡宮」の元宮は杷木林田にあり、宇佐八幡の神領で、寛永7年（1630）に大膳が宇佐八幡宮を勧請したもので、貞享3年（1686）に現在の地に遷宮しています。国道386号線沿い香山入り口に「大膳楠」があります。昔、この楠の木の側に大きな池があり、「大亀が住んでいて旅人を襲うので退治して欲しい」と村人から願いが出されます。一方、別の村人からは「あの亀は村の守り神だから殺さないで」と頼

まれます。現場に出向いた大膳は、池中央の岩の上で甲羅干しをしている牛ほどもある大亀が長い首を出しにらみ付けるのを見て、鉄砲で殺してしまいました。とたんに黒雲が一面を覆って激しい雨が降り、地面が揺れて香山の半分が崩れ落ちたため、大膳はほうほうのていで逃げ帰りました。そのがけ崩れで、民家も池も埋もれてしまいましたが、楠の木は残りました。地元の人はこの楠を「大膳楠」と呼び、がけ崩れのことを「大膳崩れ」と呼んでいたと、そんな話が伝わっています。



▲堀川の工事（水巻町教育委員会提供）



▲大膳追悼碑（円清寺）

龍光山 円清寺

黒田家ゆかりの品を多数所蔵

本寺は、福岡藩主黒田長政の父孝高公（官兵衛、如水）が亡くなった時に、杷木志波以東の領地を任されていた麻氏良城主である黒田藩家老栗山備後利安が、主君孝高公の菩提を弔うために建立したもので、山号寺号もその法名「龍光院殿如水円清大居士」に因んだものです。



円清寺



▲黒田如水画像（県指定文化財：円清寺蔵）

備後利安が、如水の
冥福を祈るために建てた
円清寺に寄贈した

慶長9年（1604）如水没後に描かれたものを、備後利安が、如水の冥福を祈るために建てた円清寺に寄贈したものである。讀は千光寺住職、宗儒和尚の筆で如水の経歴、事跡などと共に備後利安の家系や円清寺建立のことなど誌されたもので、漢文で書かれた1000字近くの長文である。この讀の中で一部消滅された部分がある。これは如水がかつてキリスト教に入信して洗礼を受けたことがあり、このことが文中にあり、当時の幕府をはばかって、この箇所を消したものである。



▲栗山備後利安画像（市指定文化財：円清寺蔵）

如水から
贈られた
合子の兜

備後利安が鎧兜を着用して数皮の上に安座している図柄で、横にかかっている兜は、如水から贈られた合子（こうす）の兜である。



▲黒田長政画像（市指定文化財：円清寺蔵）

黒田長政
戦陣の姿

長政が鎧着用のうえ床几に腰をおろし、水牛の兜を被っている戦陣の姿である。この画像の裏面には寛永3年（1623）3月、林道春撰の文字が記されている。長政が亡くなった3年後に描かれたものと思われる。

秋月博物館の名品

黒田家ゆかりの品々と美術品の数々

秋月黒田家の遺品を中心に、昭和40年に秋月郷土館が開館しました。昭和50年には、土岐勝人氏からの美術品（土岐コレクション）の寄贈を始め、多くの方からの寄付、寄贈により、郷土美術館が藩校稽古館跡地に併設されました。その後、財団の解散に伴い、これらの貴重な文化財は朝倉市に引き継がれ、平成29年に朝倉市秋月博物館が開館しました。



秋月博物館



▲巴瓦前立筋兜 紺糸威胴丸具足

この前立には次のような話が残っている。島原出陣の出発の日に、暴風で玄関の巴瓦が落ちた。家臣たちは、「間が悪いので出発を延期しては…」と進言したが、藩主長興は予定通り出発し、島原で大活躍をして凱旋した。そのことを記念して、この巴瓦の前立が製作されたといわれている。初代藩主長興所用の具足である。



▲島原陣図屏風戦闘図 齊藤秋圃

島原の乱での戦闘の様を描いたものである。とくに、秋月初代藩主長興ながおきの活躍がビジュアルに描かれており、見応えのあるものになっている。藩主長興は、律管脇立兜を被り、一本松の傍の本陣に座している。



銀箔押蛤脇立突盔形兜▲

黒田長政愛用の兜で、初代長興が譲り受けたもの。口伝に関ヶ原の戦いで長政が着用し敵將と水中で一騎討ちをしたとある。その際兜の先が水面に見えたので、家臣が水中を流れる長政を発見し、川に飛び込んで救出して、事無きを得たといわれている。



▲霊峰不二 横山大観

大観は、水戸市に生まれ、明治22年（1889）に東京美術学校の開校とともに入学。昭和12年（1937）に第1回文化勲章を受章している。大観は、明治から昭和にかけての60余年間に、多くの富士山を描いている。大観の戦後の富士山は、富士と松と雲を組合わせたものが多かった。本作品は、その一連であるが、湧き立つ雲の形が変化に富んでいる。



▲湯浴する女 Auguste RENOIR

妻アリーヌがこの世を去った後の、ルノワールのアトリエに活気をもたらしたものが、モデルのアンドレであった。この娘をモデルにルノワールは数多くの作品を描いた。これもそのなかの1点と思われる。

秋月
博物館

■開館時間／9：30～16：30（入館は16：00まで）
■休館日／月曜日（月曜日が祝日の場合は翌平日）
年末年始（12月28日～1月4日）、その他展示替え期間

■〒838-0011 朝倉市秋月野鳥532
■TEL. 0946-25-0405

清岩禅寺と 旧三奈木黒田家庭園

三奈木黒田家菩提寺 ～清岩禅寺～

三奈木の地は佐田川流域に古くから栄えた豊かな地域です。古代の「延喜式」に載る「美奈宜神社」をはじめ、中世の「三奈木庄」、近世には英彦山街道と日田街道の交わる要衝でもあり、筑前第一の大村でした。

黒田長政公は三奈木黒田家初代、黒田一成公の功績に対し、この三奈木を中心とした下座郡に領地を与えます。三奈木を治めた黒田一成公は知行領地の神社仏閣の建立に特に力を注ぎました。そのような治世の中、知行地の交通の中枢である三奈木の小高い茶臼山に建てたのが清岩禅寺です。ここは、三奈木黒田家の菩提寺であり、秋には山全体が紅葉で見事に色づきます。



清岩禅寺

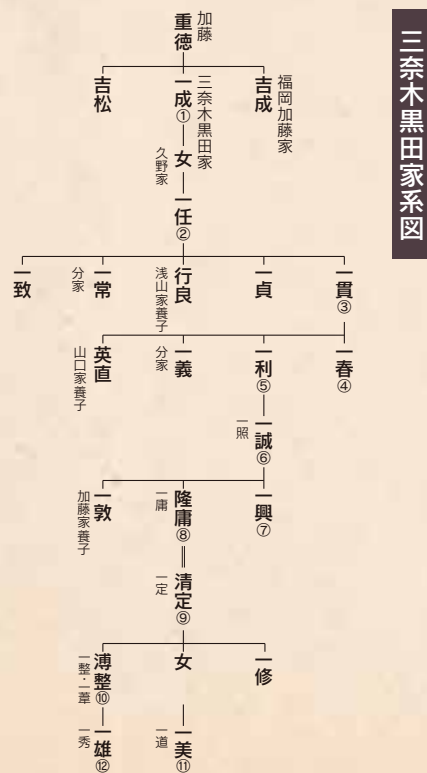
旧三奈木黒田家庭園 朝倉市指定文化財

朝倉市指定文化財となっているこの庭園は、福岡藩の筆頭家老であった三奈木黒田家の別邸(通称:御茶屋)に作られたものです。室内から鑑賞する形式(座観式)の池泉庭園で、池の周囲を土堀で囲み、池際には景石を配し、東西から突き出た出島、池中央の中島などを設けています。さらに背後には古処山が遠望できます。慶長5年(1600)、黒田長政が筑前に転封されると、その家臣黒田一成(1571～1656)には、三奈木を含む下座郡に知行地が与えられました。一成はこの地に屋敷を建て、周囲に家臣団を配しました。庭が作られたのもこの頃で、池の底に確認された一回り小さい護岸の石組みが当初の池の大きさだと考えられます。

明暦2年(1656)8月、福岡藩3代藩主光之が筑後川での鵜飼い見物の後、この屋敷に宿泊しています。この頃の屋敷を描いた絵図面には、現在とほぼ同じ形の池が見られることから、2代当主一任(1608～1674)が藩主の訪問に合せて建物を改築した際に、池を広げたり、取水口を付け替えたりといった改変を行ったのでしょうか。10年後の寛文6年(1666)6月にも、光之の訪問の記録がありますが、それ以降には藩主が訪れた記録は見られません。明暦頃の絵図の他にもう一枚、江戸時代の絵図があり、明暦の屋敷と比べると、西側・南側等が解体され、規模が縮小しているのが確認できます。時期の特定はできませんが、南西側の物置部屋と重なる位置に、弘化4年(1847)と彫られた井戸が現在残って



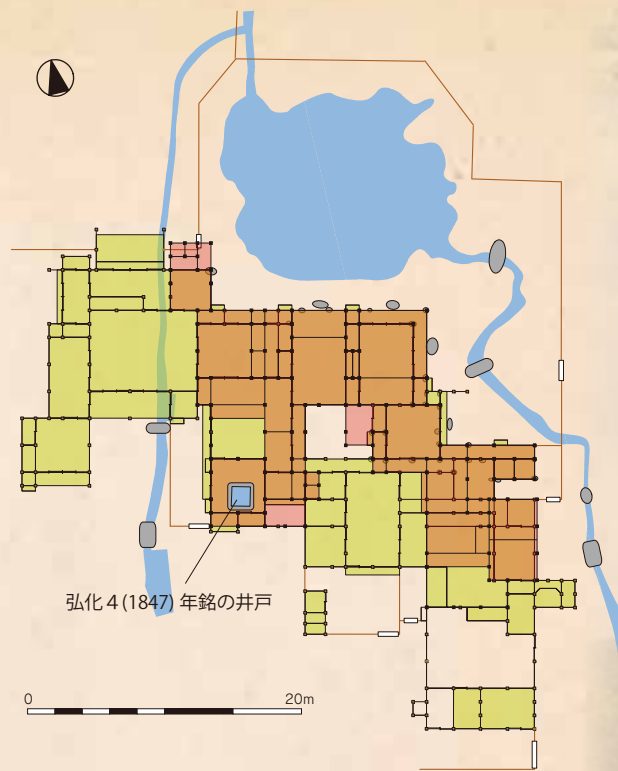
旧三奈木黒田家庭園



▲黒田一成肖像画
(三奈木黒田家菩提寺 清岩禅寺所蔵)

おり、それ以前の江戸後期頃と想定されます。この規模縮小の要因の一つとして、6代当主一誠（1713～1787）の隠居後の住まいとなったことが挙げられます。宝暦4年（1754）10月、彼は病気を理由に42歳で隠居し、亡くなるまでの30数年間を三奈木にて過ごしています。この隠棲時代に現在残る庭園の形ができあがったものと考えられます。

	明暦期の建物
	江戸後期の建物（重複部分）
	江戸後期の建物（増築部分）



水城山 正福寺

荒木村重と加藤家の縁 ～至誠～

水城山正福寺は浄土真宗で開基は摂津国伊丹（有岡城主）荒木摂津守村重の一子、正七郎了保です。この寺の由緒は約400年の昔、天正の初めの戦国時代にさかのぼる遠因があります。その頃、智将明智光秀、己れに何か期する所があり、策を講じて言葉巧みに村重公に謀反する心があるとして、織田信長にざん言をしました。一徹で短慮な信長は前後の調査もなく、光秀の言を信じ、すぐさま大挙して配下の軍に、有岡城を取り囲ませました。不意の戦闘にもかかわらず、三千の城兵は勇戦奮闘、一を以って百にあたり、度々攻撃陣を苦しめましたが、衆寡敵せず、さらに日を経るにしたがい、城内の糧米は困窮し、また如何とも戦術はありませんでした。急報は到り、盟友の毛利氏は直ちに兵馬を整え、応援の出兵をしたが、援路を塞がれて、到着前に遂に流石の名城も、天正7年（1579）11月15日落城の悲運に陥りました。有岡城落城と共に、村重公の子女は重臣に護られて西下し、南朝の忠臣である、筑後国草野の発心山の城主、草野家清により、その客分となり、歓待されていました。超えて天正15年3月、豊臣公の九州征伐があった時、この草野城も攻略されたので、村重公の一子（又は女子とも云う）何某は城を脱出して、時期を待っていたが、機到って竹野村に光伝寺を開基して一堂をしつらえ、今に繁栄しています。また一子正七郎了保氏も、草野落城後無常を觀じ、武士を捨てて僧となり、修道に精進されました。戦国の世の常として、人は榮枯して定まりがありません。織田氏滅亡の後、豊臣氏全盛時代も夢と過ぎ、関ヶ原の一戦に徳川氏の壮図はなり、論功行賞により、慶長5年（1600）に黒田長政公筑前の国主に封ぜられ、12月に入国されました。たまたま、有岡在城時代の重臣、加藤又左衛門重徳の二男玉松殿（後三奈木の黒田一成公）が黒田官兵衛の養子となり、のち家老職となり、筑前国下座郡三奈木荘に在住されました。旧縁を重んじられた一成公は、正七郎了保氏を招請して、下座郡水城郷下八重津、棕木屋敷の地に寺地を与え、草庵を結ばせて、荒木庵（こうぼくあん）を称し、安住の処とされたのです。以後、毎年黒田家より、吉凶は勿論、慶弔節会には、礼儀を正されていました。当時の辞令、書附等は寺宝の一つとして保管されています。正七郎了保氏の寂後、黒田家より毎年墓参りがあり、御供物も鄭重であったそうです。その墓は荒木庵の跡、今の棕木屋敷にあります。正七郎了保氏の嫡子浄念和尚第2世の時、慶長16年（1611）9月8日付、本願寺准如上人より辞令を以って、正福寺の寺号を賜りました。第3世玲山和尚の時、寺域拡張によって、霊地を選び、下八重津より現在の位置、長田村町に改築移転されました。



正福寺

秋月城下町を歩いてみよう



古処山



秋月中学校

杉の馬場へ



杉の馬場通り



「秋月」の近世城下町としての町割は、寛永元年（1624）に黒田長興が行った縄張りを元型としています。江戸時代中期以降は、町地が中心地区から外側へ拡大しましたが、町割り全体には大きな変化はありませんでした。しかし、明治の廃藩により城下町としての機能を失った秋月では、氏族の急激な流出により、武家屋敷地の多くが田畑に転じたため、以降は町地が中心となって存続してきました。近代を通じて今日まで大規模な災害もなく、また昭和初期に行わ



瓦 坂



桜の名所 杉の馬場

長屋門へ



杉の馬場通り



れた道路の建設と拡幅を伴う杵形の改変や交差部の角切りを除くと著しい開発等もありませんでした。これにより、秋月の城下町としての基本的な構造は維持され、秋月城跡散策の際に、明和期や文政期の城下町絵図（古地図）を持ち歩いてもさして困ることはなく、周辺の豊かな自然と相まって城下町らしい歴史的風地をよく伝えていきます。

また、平成10年には国の重要伝統的建造物群保存地区にも選定されています。

秋月城下絵図 ▶
(福岡県立図書館所蔵)





秋月城模型（秋月博物館）



長屋門

瓦坂へ

秋月城跡



杉の馬場通り

古心寺／大涼寺



古心寺 こしんじ

秋月藩初代藩主、黒田長興公が父長政の菩提を弔うために建立したお寺です。白壁の塀に囲まれた墓所には、黒田長政をはじめ秋月黒田家の歴代藩主のお墓があります。また、境内の一角には日本最後の仇討「臼井六郎」のお墓もあります。

大涼寺 だいらょうじ

秋月藩初代藩主、黒田長興公入国後、寛永12年大涼院殿（母・長政公夫人）死去に際し、院殿の御廟を建て、御位牌を安置し秋月山浄仙院大涼寺と改称されました。大涼院殿は徳川家の血縁で、当山を菩提所と定め葵の御紋を付したのもそこに由来します。





梅園



黒門

黒門へ



杉の馬場通り

旧田代家住宅／久野邸



旧田代家住宅

旧田代家住宅は、秋月藩の上級武家屋敷（150石、428坪）です。城下町に残された武家屋敷の中でも規模が大きく、また、この住宅のある区域は中央寺と呼ばれ、谷（浅ヶ谷）を挟んで秋月城と対峙する要衝で、田代家以外にも上級家臣が配置されています。

久野邸

旧田代家住宅と同じく、上級家臣屋敷（100石、320坪）です。旧田代家には見られない仲間部屋や馬屋、離れなども見ることができます。



朝倉

みどころMAP

散策



福岡都市圏からの交通アクセス

◆JR新幹線・在来線利用

博多駅 → 20分 → 基山駅 → 25分 → 甘木駅
JR鹿児島本線 甘木鉄道(レールバス)

西鉄福岡駅 → 30分 → 小郡駅 → 20分 → 甘木駅
西鉄天神大牟田線 甘木鉄道(レールバス)

◆西鉄電車・バス利用
西鉄福岡駅 → 20分 → 朝倉街道駅 → 40分 → 甘木
西鉄天神大牟田線 朝倉街道駅 → 60分 → 朝倉
朝倉街道駅 → 70分 → 杷木

◆高速道路利用
太宰府 I.C. → 九州 → 鳥栖 JCT → 大分 → 甘木 I.C.
朝倉 I.C. 杷木 I.C.

凡 例			
-----	西鉄甘木線	-----	大分自動車道
-----	甘木鉄道	-----	主要道
-----	JR	●	国道
		●	県道
		P	駐車場

バス・タクシー等のお問い合わせ先

- ◆甘木鉄道 ☎0946-23-1111
- ◆西鉄バス 西鉄お客さまセンター ☎0570-001010
- ◆朝倉観光バス路線事業部 ☎0946-24-0023
- ◆安全タクシー(株)朝倉営業所 ☎0946-22-2680
- ◆矢野タクシー(株) ☎0946-22-2600
- ◆ひまわりタクシー(有) ☎0946-62-0043
- ◆浮羽交通タクシー(株)原鶴営業 ☎0946-62-0010
- ◆(有)朝田タクシー(株)原鶴営業 ☎0946-62-2251

東峰村

A map of the area around Hachiman Shrine (Hachiman-jingu) in Nara. The shrine is marked with a red dot and labeled '朝倉神社'. Other landmarks include '宮野神社' (Miyano-jingu), '別所神社' (Betsu-jingu), '万徳寺' (Mandoku-ji), '天子の森' (Tenno no Mori), '朝倉橋' (Asakura Bridge), and '朝倉郵便局' (Asakura Post Office). The map shows the '大分自動車道' (Oita Expressway) and '国道386号' (National Route 386). A blue 'P' icon indicates a parking area. The map also shows the '桂川' (Katsura River) and the '大分県道79号' (Oita Prefectural Route 79). The map is titled '大庭宮跡周辺' (Around the Site of Ootani Palace).

日田市

うきは市

秋月 城下町 MAP

秋月氏、黒田氏の栄華がひっそりと眠る城下町。約800年のさまざまな歴史と悲話を秘めている。まち並みは、武家屋敷や土堀、苔むした石垣、格子がつづき、まさに「筑前の小京都」。5万石城下町として栄えた秋月。今も古に逢えるまちです。平成10年4月に、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。



お問い合わせ先

■ 朝倉市商工観光課
TEL. 0946-52-1428
最新の観光情報はコチラ！

■ あさくら観光協会
TEL. 0946-24-6758
最新の観光情報はコチラ！

表紙写真について

■ 律管脇立桃形兜・緋系威胴丸具足 小具足付：この甲冑は、黒田如水から長政へ、そして長政から秋月藩初代藩主長興へと伝来したものとされている。長興は、島原の乱の出陣の際、この甲冑を着用している。金色に輝く脇立は、自己の高揚と、武勇を誇示する目印でもあった。この甲冑をつけた出陣姿が島原陣図屏風にもみえる。

● 参考：ふるさと人物誌、甘木市史、杷木町史、村史「ひなしろ」 ● 秋月博物館収蔵品撮影：藤本健八氏